

---

# 世界をとるか、少女を救うか 10年2月改訂版

大蛇真琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界をとるか、少女を救うか 10年2月改訂版

### 【Zコード】

Z9836

### 【作者名】

大蛇真琴

### 【あらすじ】

世界をとるか？一人の少女を救うか？

大蛇真琴のSFアクションの改訂版。

(前書き)

転載禁止。

## プロローグ

大都会・東京。この雑踏が代名詞とも言えるこの日本の首都で、今ゲーム界を震撼させるゲームの登場に、若い世代やおじさんまでも、熱を帶びていた。

舞台は、港付近にあるイベントブースの十八番となつたスタジアム。

そこに何も知らない俺らはいた。ただ、熱を帶びたその場所へは、深夜から並ぶと言つ一般的な風習が存在する。その風習に乗つ取り、前夜から暑い夏の夜の冷えた中から、俺らはいたのだ。

事前に購入していた、パンフレットを見る。目玉以外俺らの頭にはなかつた。

「【インペリアル・ウォー】か…。名前は古いけど、内容は今風だな」

その名は、俺が言つたとおりだ。

設定は、異世界人が侵略し、俺らが食い止める。何のこともない、かのSFRPGみたいだが、その操作方法は斬新かつ、新参的だった。

異世界人とコントローラーなしで戦えるという、このアーケードゲームは画期的なシステムで、今や少年少女…果ては大人まで、出来てしまつ。そんなゲームが完成したというのだ。

けど、俺らは疑問に思つていた。

「しかし、妙だな？大人は乗れませんつて書いてあつたけど？」

そうなのだ、大人は乗れないと書かれているそのゲームには、矛盾点があるので。

「体重が関係してゐんじやないか？後は、ゲーム廃人、大人が多いだろ？今の時代」

確かにそうだ。このゲームは万人向けではなかつたのだろうか？

「…は、自…供を…せ…すか？」

その声は、僅かに十一程。

かすかに聞こえてきたこの言葉に違和感はさりげに深まった。

そう、違和感はあったのだが…。

「しかし、まあ…」

時…既に遅し、俺達はもうブースの中にいるのだ。しかも、並んでいる。次の番は俺達だ。抜けられる筈もない。ここで抜けたら、この業界は白い目を向けられる。

「…タダなんだし。遊ぼうぜ？」

幸い、プレイに金銭は取られなかつたため、避けられるはずが尚更ない。

「だな」

しかし、プレイを拒否された大人は愕然とした目で「ひかり」を見ている。一体、何があるというのか？

見た目は、今風のアーケードポッドだ。極自然な形をしており、形状は昔のプリクラを連想させる。

ボックスの中に入ると、本当にコントローラーがなかつた。ただ、球状のコントローラーらしき物が置いてある。それだけだつた。

「中央の認証パネルに手を当ててください」

機械的な音声が流れる。その機械的な音声は、俺達の知つてゐるP.C.音楽少女とは違い、物凄く単調なものだつた。

手を当てるといふと、少し電流が来た。まさか、これで終わりと言つわけではないだろう。そして、疑問に思つ。何らかの言語が、脳内に浸透し、体の隅々まで伝わる。まるで、血流を巡るかのようだつた。

「何だ？」

疑問は多い。画面に映つてゐる、俺の知らなかつた文字が読めるのだ。

「認証完了…。では、ゆっくり遊んでください」

その言語で書かれた画面を見ると、クラスは騎士。使える武器はロングソードだつた。しかし、その後ろに何故か？マークが付けら

れている。

「画面から操作方法が流れる。すると、パンフレットに書いてあった通り、思ったとおりに物事が動くらしい。」

「剣を振るイメージを試しにする。すると、剣が思う様に動くのだ。左右上下自由自在に。」

しかも、距離まで幅を合わせられ、これはただのシミュレーションじゃない事が分かる。

「何なんだ？しかし、やるしかないな」

敵は、人間が現れた。俺と同い年ぐらいの少年少女に見える。盾を使い、剣を振るう少年、その後ろに『』を持ち、『』を鋭く狙う少女。まさに本物と比べようがない。

それらを振り払い、止めをさす。どうやら、このゲーム突きまで出来るようだ。

「どこまで精巧なんだ？だけど、これはゲームなんだろ？」

自問自答する。その疑問は残つたままだ。

「うして、敵を20前後狩つた後、ゲームの終了の画面が出た。どうやら、ステージをクリアしてしまつたみたいだ。」

「剣…ね。自分の名前復唱するみたいで、嫌だな」

後ろから肩をたたかれる。猛だ。

「この状況、喜ばしいと言つか、残念といつか…。」

「剣、お前どうだつた？」

何気なくゲームをやつていただろう、猛は気軽に話しかけてきた。多少、嫌々ながらも答える。

「ステージクリアしたよ」

その言葉に、猛は驚いたようだ。

「くそあ、大鎌なんて使うから、硬直長いんだよ…」

俺は疑問に思つた。支給品が違うと言うのは、ゲームでは極まれだつたからだ。しかも、それは伏線も込められている種類が多い。

「ん、配給された武器が違うのか？お前、クラスは？」

猛はスッと答える。

「ジョーカー。俺は愚か者ってことか…？じやなきや、性格診断までやりっこしないだろ？」「…」

（…）いつ、性格のことも頭に来てんのか、ん？）

俺は驚く。クラス…つまり、職業まで違うところのは、明らかにおかしい。しかも、発表前の試作品でだ。

「性格だつて？」

猛は頷く。それは、かの有名な三部田を思わせる。

「おう、画面に出てたぜ？気づかなかつたのか」

俺は思い返してみる。そういうのもあつた様ななかつた様な…。

けど、猛が言うんだ、間違いないだろ？

「そう言えば、何かあつた様な…」

俺の思い違いならいいと願うしかなかつた。

そう、あの時…。こう聞こえたのだ。それは、絶望と終焉の予告と序曲であるが如く。

「貴方は、自分の子供を殺せますか？」

「データ回収したの？」

澄んだ声の少女が無線で連絡をしている。繋がつてている先はどこかは、分からぬ。しかし、その赤い迷彩服は、軍を思わせるが、華やか過ぎた。

「そう、じゃあ。身元確認急いで、ある子がこちらの戦力になつてくれるかもしれないわ」

何百もあるデータから搾り出されていたのは、【天翔 剣】。そう、あの剣だつた。少女は酷く急いでる様子だつた。

「それと、サブマテリアライザーは、完成したの？ちょっと…まだなの？」

少女は声を荒げる。重要なことらしい。

「まあ…いいわ。多分、あちらも動くでしょ？」

あと先には、【ブラン】と書かれていた。

内容はこうだ。

「私は異星人のヒューマノイドモデル、通称【ブラン】です。【ノワール】を止める為に、あなた方にこのシステムをお渡しします。…マテリアライズシステムの器具。通称…マテリアライザー。今送つた、ゲームのテストを早めてください。時間の猶予は本当にありません」

「…という内容。私からしてみればどうでもなかつた…。本当なら。『時間…、か』

少女の記憶に残つているのは、愉快な少年の事だった。

適合者…。それは、現代ではあり得ない、所謂魔術、魔法と称されるものを扱う者である。

適合者しかし、その強靭な能力は凄まじい物だった。

しかし、それを外部に持ち込むと言つのは、どういう事なのだろうか？

アメリカ軍特別部隊、ファルコン。ここでは、近日異星人と思われるコンタクトが寄せられ、ファルコンが結成された。

この行動は、各国は裏で既に把握しており、異性人排除の元、団結を固めていた。

「サクラ・アル・レフオリア。ファルコンへの転属が決まつた。至急用意せよ」

日系の少女は、キーボードから手を止める。

大人しげな少女は、声が出せず、敬礼で表現する。

「このチームには、我が軍からサクラ。そして、北欧からアレックス・E・ジャイナ…。そして、リーダーにクエス・パリアナか…」

少女は不安そうだ。何しろ、あの三人とまた組むとは思つてなかつたからだ。しかも、配属は日本らしい。

「大丈夫だ、お前の役目は特化された、暗号を送ること、探すこと。お前には十分出来た。…案ずるな、この者達も同じ年ぐらいた」

少女は安心した様子で聞いている。

「行け、サクラ・アル・レフオリア特別二等兵！」

サクラは敬礼をし、ヘリへと乗り込む。

上官は不安そうだ。

「…寒い時代となつたものだ。世界の希望の光が、子供達だと言つ」とは…」

そして、二日後。

「クエスは今、日本にいる。データ収集のためだ。特化された人間が見つかつたらしい」

男は笑う。タバコを吸いながら、空を見上げ、なんとも軽々しい言葉を使う。

「特化？それは、子供に対する言い方じやないでしょ？それに、現代に魔法なんてもの…異端過ぎる」

「… ファルコン本部…、そこではこの言葉は常識ではない。ニューヨークに本部を置くここでは、ある施設から続々と【特化された人間】が配属されてくる。しかも、全員少年少女だ。

「ここは、特別なんだ。それに時を緩めたりするぐらいいの奴がいる。確かに化け物つて言つちや、化け物だが、特化のほうが聞こえがい」

白髪の少年が立つていた。車を止めて、直ぐの事だつた。

「聞こえているぞ？補充部隊の一人。それに、化け物は…聞き捨てならないな？」

隣に立つていた少女はクスリと笑う。その怪しげな笑いは、正義とは程遠い。

「なんなら、処刑しちゃう？相手は大佐級だよ？無礼にも程があるよねえ？」

彼女の笑いは止まらない。目は死んでいる魚のよつこ、無様な男達をすすり見ている。

「まあ、俺が殺さなくとも、あいつなら殺すだらう？..」

「誰をさしているか分からぬが、この会話は異常だつた。」

「まあ、命拾いしたねえ…。僕なら簡単に殺しちゃうけど」

残つた二人は、頭を抱えていた。

「どうするよ？本部に転属して、命拾いしたどこるか…、今すぐにも殺されちまう…」

クエス・パリアナは、日本に来ていた。

「まだなの？情報処理遅いんじゃない？早くしなさい！急いでるんだから」

クエスはサクラを考えていた。あの子なら、今すぐに終わらせる事が出来るのだ。

猛暑の中、赤い帽子と、赤いコスチュームは、軍隊の服とは思えない程、可愛かった。

「そこ、写真撮らない！だから、ジャパニーズは…」

データ解析終了の文字が出ると、特に特化された人間が一人、いることが分かった。

「天翔 剣…。年は16か、同じ年ねえ…。それで、SPのキャパシティは…」

クエスは驚いた。この数字は、普通の人間では有り得なかつた。「すぐに向かうわよ！この子ならファルコン入団の資格を通り越してるわ！」

クエスの急ぐ理由は、人を死なせない為だった。

【天翔 剣】のデータSP 350。通常の3・5倍…、サブマテリアライザー導入なし。

「 テスト稼動中…。前回の侵略データ削除」

月の影に常に停泊しているUFO内だつた。

少女と少年が並んで大きな試験管に入れられている。

二人とも、息はあるようだ。

「言語把握能力…。目標の対象物の言語を全て認識させます」

二人は、顔を歪める…。少女のほうが苦しそうだ。

「被献血プラン、脳波レベル、レッド」

プランと呼ばれた、少女のカプセルに鎮静剤が投与される。

「フム…、白は、許容量が少ない…。いや…、以前の記憶があるのか? データ認識どうなつてている?」

オペレーターがPCだと思われる端末で、詳細を調べ始めた。  
「オープンデータ、一件だけあり。どうやら、対象物へのデータ送信をしたものと思われます」

対象物…それは、地球だつた。

「フム…。まあ、いい。今回も私達の故郷になる事は変わりない」  
オペレーターは、無視している。

「上官…。私たちはいつまで、このよつた事をやつてこるのでしょ  
うか?」

上官と呼ばれた男は笑いながら言つ。

「馬鹿だな…。いつまでも…だよ」

この世界には、いくつものパラレルワールドが存在していると言わ  
れている。

そう、地球もまたいくつもあつた。それを超えられるのであれば、  
5次元世界に行くとされている。

果たして、5次元を超えるにはどうすれば良いのか?

心は超えられるとされる。では、肉体はどうすれば、超えられる  
のか?

その答えはこうだ…。遺伝子情報を全て読み取り、データとして、  
次元の違う空間に送る。

しかし、次元を超える受信機はどうやって作り出されたのだろう?  
実在にやつてのけたのが、このプランを作り上げた異星人だつた  
。

## エピソード 白と黒襲来

蝉が鳴く暑い夏の夜。作戦は実行された。

「目標位置、投下します」

上空のコントローラから投下されたのは、例の少女と少年だった。

「プログラム開始…。作戦実行」

少女はふと目が覚めた。

「ここは、地球？」

古い趣の学校らしきものがある校庭に一人は投下されたはず…だった。

「ノワールがいない！」

少女は、周囲を見回す。だけど、人影がいなかつた。

ただ、脳内端末にメッシュエージが残されていた。

「役立たずの足を引っ張るお前へ、俺だけで作戦は実行する。探し

たければ、探せばいい。けど、早々簡単には見つからないぜ？」

少女はしまったとばかりに顔を曇らす。現状では、この世界のこ

とを把握するほうが先だ。

そして、有能な適合者を探すのも重要だった。

「私には、サーチ機能はない…。それは、ノワールも同じ。けど、あの子が既にプログラムを起動させていたら…」

凄い不安がよぎる。

プランは、足を急がせることにした。

「ふう……」

学校は休みだと言つて、明日から剣道の合宿だった。  
剣は支度をする。

「しかし……あの学校は厳しいぜ」

県立和学校。剣道、古武道、弓道、馬術、柔道に秀でた日本の  
文化を思わせる、体術のスペシャリストを集めた学校だ。  
その成績は、メダリストや競馬の有能な選手が輩出される学校で、  
そのため規則も厳重だ。

「あつ、タオルが足りない……」

昨日は、雨で洗濯物は乾いてなかつた。

「しゃーない、コンビニ行つてくるか……」

剣は自転車に乗ると、およそ30分掛かるコンビニまで足を運ぶ  
ことにした。

剣は、途中銀髪ロングヘアの辺では見かけない女の子を見  
る。

気になり、足を止め、声を掛ける事にした。

「ねえ、君」

少女はハツとする。しかも、俺の顔を見るなり酷く顔をこわばら  
せた。

次の一声からして……疑問に思つた。

「貴方、適合者?」

俺は顔を顰める。

「適合者?なんだそれ?」

「私は、プラン。プログラムの名前だけど、貴方適合者よね?貴方  
の体からマナを強く感じる……」

一種の靈媒商法かと思った。だが、引っかかった点もある。

「クラスはナイト。武器はロングソード……」

俺は驚愕した。これで、合致点が複数存在する事が予想できた。

「これは、俺の僅かな確信だつた。

「君、なんでそれを？」

俺は、この子を家に呼んで話を聞くことにした。あのゲームの事を。何故、大人を乗せなかつたのかを。そして、あのゲームの内容は現実に起つたのかを。

遙か昔、マナを操る魔女と呼ばれた人物達が地球に存在した。その魔術は秀でたものは天氣すらも操り、未来予知も出来たとされている。

西洋は魔女。東洋は陰陽師。これらの技術は、少なからず、現代にも存在している。

西洋は薬学、科学、金属の加工。東洋は、星の観測、占い。両方に共通するのは、天気の予測。

そして、マナは枯渇はしないものの、使い手がいなくなつたことで存在すら忘れ去られていた。そう… そのはずだつた。

「遙か昔、マナを操るものがいたの。魔女と呼ばれる者よ。俺は、信じがたい話を聞かざるを得なかつた。なぜなら、不安がよぎつたイベントの日から疑問に思つていたことがあつた。『マナは扱い方を知らなければ、人体を暴走させてしまうの。だから、子供から扱えるようにしなければいけなかつた』俺は納得する。

「なるほどね…」

だから、あのイベントの場所は格好のポイントだつた。

「あの日、そのプログラムを送つた…。私の記憶が消される前に…。どういう内容だつたかは覚えてないわ。履歴だけが存在してるので、俺は、あのことを話す事にした。

「2週間ほど前、東京でイベントがあつたんだ。そこで、【インペリアル・ウォー】ってゲームを体験した。それが、適合者の選別プログラムだつたんだね？」

プランは頷く。それは、俺も予測できた。

「それで、大人が乗れなかつた理由は？」

表情を曇らせながら言つ。

「大人の場合、0・01%しか適合者は現れないの。その場合、世界は子供達だけの適合者より崩れやすくなる…。だから、それだけは避けたかった」

…なるほど。だから、世界が狂うスピードを遅めた。つてことか。プランは続ける。

「でも、ステージをクリアしないと、リンクしたマナとニ割から五割しか扱えないという結果になつてしまつ。それで、マナライザーの力が強かつたら、結果的には暴走をしてしまつ…」

俺は不安がよぎつた。猛だ。あいつは、クリアしていない。そう、もしかすると、暴走の危険性が人より強まる。

「んじや、猛は？」

プランは、その理由が分かつたようだ。そして、思い切つた問いかをする。

「猛つて子のクラスは？」

「ジョーカー、武器はデスサイズ」

少女は剣に詰め寄る。猛は本当に【愚か者】になつてしまつ危険性がある事を俺も理解した。

「その子の所に行きましょう！ 今すぐ！」

「クラス…ジョーカー…。精神崩壊を大きな力の根源の代償とし、その猛威はクラス・バーサーカーに引けをとらない。武器をデスサイズとする事で、更なる強さを發揮する…」

自転車の後ろの座席に乗りながら、プランは剣へと伝える。

「連絡も取れないんだ…。力のせいか？」

プランは、プログラム起動のスイッチが押されていることに気づいた。それは事をさらに急がせていた。

「多分、そうね。けど…一般人じや、普通ここまで大きな力になら

ないのが常識。何故?」

剣は悔やみながら言つ。

「多分、俺と喧嘩した時はいつも剣道でけりをつけてた。そのせいだろ?...」

ブランはなるほどと相槌を打つ。

「恐らく、そのせいで、ポテンシャルは人より上みたいね。で、その勝負の結果は?」

剣は即答する。それは、最悪の結果だつた。

「五分五分」

ブランは、不安が積もつていた。

猛の町に着く。剣が、コンビニに行こうとした町だ。

「何だ、この血の量は!」

凄まじかった。血の雨でも降ったかのようだ。道路が真紅に染められていた。あるいは、生きていたのかと思ひ、無数の肉片の広場。

「貴方も、マテリアライザーを起動して!」

剣は、どうするのか見当も付かなかつた。

「剣をイメージするの。手に持つようだ!」

剣は、剣を連想する。鞘を腰に巻き、剣を取る自分の姿を。すると、炎の渦が剣を取り巻き、炎の剣を右手に握り締めていた。

「使える時間は、今から1時間弱。さあ、行きましょう」

猛の前に、黒い髪の少年が立つてゐる。しかも、凝視していた。

「何だよ? やんのか?」

少年の瞳をじっと見た時、自分のいたところは、別世界だつた。

「面白おかしくもある愉快な人類よ? 進化を遂げてみないか? 幸いにもお前にはその準備が出来てゐる」

猛は激怒する。何を言つてゐるのか? こいつの頭はおかしすぎた。

「いいねえ、その顔。だから、人間は好きだ。観察して面白い」

猛は果敢に殴りに掛かる。足で全力を大地と呼べるか分からぬ

ものを思いつきり蹴り、幅を詰める。

しかし、何かの力により突き飛ばされている。それは、一種の魔法ではないかと思った。

「好戦的なクラスのようだね。まあ、愚か者のほうだけだ」「猛は身を起こし少年に言い放つ。

「おまえ、何者だ? なんで、お前も愚か者って言うんだ!」

少年は笑う。その恍惚なる笑みは、死神を連想させる。

猛の脳裏に死を連想させる。

「俺か? 俺は、君にある力を授けたプログラムの一部だよ。名前はノワール」

猛は続ける。

「何を分からぬことを言つてる? 明白なことを言え!」

少年は、猛に少しずつ近づいてくる。猛は恐怖を覚えた。

「いいだろう、クラス・ジョーカーの戦士よ。しかし、君はマナの力を半分しか生かせてない…。けど、それも見物だ。さあ、受け取るがいい、疾風のデスサイズを」

猛は意識を失う。

次に猛が目を覚めた場所はよく見た河川敷だった。  
手元には、デスサイズが置かれていた。

「これが、俺の力」

それに飲まれることは恐らく理解できただろう。だが、避けることは不可能であった。

炎の渦は天まで届く勢いだった。

それを見たのだろう、奇声が近づいてくる。

それは、まさしく猛だった。

鎌を振り、先制の一撃を空中から加えようとする。距離は遠いが、何故か斬撃だけがこちらに来る。剣は、剣で止める。思ったより、重い一撃だ。

「ブラン、離れて！」

ブランは頷く。

「相手の属性は風よ。それだけ注意して」

鎌と剣の交わす金属音が鳴り響く。剣は不利な状況にあった。剣の属性の炎が弱まっているように思えたのだ

(…不完全燃焼している…)

自分の体術と、剣道のノウハウを生かし、距離を詰め、相手の顔面を狙い、ハイキックをする。

しかし、鎌の刃が邪魔をし、届かない一撃となる。そこを、狙つたのか、鎌の柄を使い剣の腹に一発食らわせる。

「くつ…、巧い」

それに気づいたのか、どこからともなく光の妖精が現れた。魔術で、ブランが出したものだろう。しかし、攻撃は弱く…。猛の風の盾を貫けるものではなかった。

剣はその隙を突き、鞘で頭を思いつきりたたく。しかし、猛は動じない。

「くそ…打つ手なしかよ」

またも、金属音が鳴り響く。猛の変わったところと言えば、頭から流血しているぐらいだ。

「猛、いい加減目を覚ませよ！俺達親友だろう！…？」

しかし、今の猛には動じなかつた。

剣は叫んだ。

「ブラン！他に方法は！…？」

ブランが出てくる。ショルターを作り、話の場を設けた。釜の斬檄が飛ぶが、壊れる様子はなかつた。

「相手も大分弱つてる。その隙を突いて、あの鎌を壊せば、おそらくあの子のマナは0になるわ

「了解」

剣は、自分の相棒に渾身の力を込める。

(…聞こえるか？相棒、親友を助けたいんだ。俺の命はどうでもい

い！だから、力を貸してくれ！）

炎の渦が力を増し、剣と融合する。その同調の叫びは、龍の声にも聞こえなくはない。

「あれは…、バーンソード。クラスは、普通マジックナイトの物。何故、剣が使えるの？」

ブランは止めに入る。

「貴方のクラスではないものを使うと、暴走するわ。今すぐ、その剣を離して」

業火と疾風の力の差はこれで五分五分になつた。鎌に当たると、鎌はすぐ煙を放つ。

…溶解だ。剣の相棒は力ずくで猛の鎌を壊そうとしている。

それに気づいたのか、猛は距離をとる。

飛ぶ斬撃で、剣に軽症を与えながらも、なおも続ける。しかし、距離は詰められていた。

「ハアアアアツ！」

鎌を捉らえた業火の剣は、猛のデスサイズを完全に溶解した。

戦つた二人は、意識を失い…倒れた。

「何、この状況…。もうプログラムは発動したって言うの？」

クエスは、車を急かさせた。

そして、廃屋にたどり着く。それは、剣と猛がいる場所だった。戦闘が終わつた二人の傷は、剣を持った少年の方が深い。

一人を介抱している少女を見つける。

「貴方、ブランね？」

突然のことに、ブランはびっくりしたが、頷く。

「全国連本部会直属私設軍ファルコン本部のクエス・アリパナよ？ 状況を説明してもらえるかしら？」

ブランは、それに応じることにした。

## エピローグ

剣が目を覚ました場所……。それは病院だった。病室は思ったより狭く、個室のようだ。

「そういえば、猛は！」

勢いよく起きたせいで多少傷が痛む。腹を掠り、体全体に軽い切り傷が出来たようで、包帯が腕や、足に巻かれていた。

「そんなに焦らなくてもいいわよ」

声の主はブランだ。

「起きたみたいね？」

もう一人、カーテンの向こうにいる。しかし、声の主は知らない。

「君は？」

少女は微笑みながら答える。

「クエス・パリアナ。16歳。全国連本部私設軍、日本支部に配属されたファルコンの日本のリーダーを勤めさせてもらつわ」「ファルコン? って、何でそれを俺に?」

疑問は残る。

「天翔 剣殿。本日より、ファルコン日本支部に配属が決定されました。よろしくね、ジャパニーズ」

視線をプランに向ける。

「戦いは激化するのが妥当よ。これからも、続くと思うわ。けど、それで一人だけだったら、直ぐに死んでしまう…。酷な言い方だけど、貴方を生かすためなのよ?」

剣はなるほどと相槌をうち、切り出す。

「猛は?」

少女はため息をつく。

「あのジャパニーズね…、私の格好を見るなり、ここはオタクの聖地か!って言うじゃない…。呆れるほど、元気だつたわ」

俺は一息胸を撫で下ろす。

「猛もファルコンに?」

クエスは首を振る。

「あの子にはもうマナがひとかけらも残つていなかつたわ。所謂、化け物から常識人に戻つただけよ」

プランが、助言をする。

「ノワールの意識の欠片が残されていた。だから、多分あそこまで強かつたんだと思つ」

クエスが、ドアの鍵をロックして話し話し始める。

「そうね、あの子の力は、Bクラスだった。サブマテライザーを使わなくとも、あの状況から言えば、そうなるわね」

猛の事について加える。

「この戦争が終わるまで、彼は大量虐殺犯として、世間で騒がれるでしょうね。けど、そんなこと全世界でもう起こってるわ」

プランは黙る。

「貴女のせいってわけじゃないのよ? 本来は、これを仕掛けた張本人達のせい…。貴女は、一部の端末にしか過ぎなかつた…。道具に善悪なんて問うより、使つた本人達のほうが悪いに決まつてゐるんだから」

プランは、こう切り出した。

「その異星人つて言うのが…、未来の地球人なんです」

俺とクエスは驚いた。

「はあ？ 何それ…。どういうことなの？」

「正確には、別次元の地球人。深く言えば、未来人…という事になります。未来人は、鉱石や自然物質を使い果たし、地球を再生不能にし、そして、略奪なども頻繁にきました。それを不快に思つた未来の宇宙船の人間は、次元を超えて、端末を転送することに成功したのです」

クエスは、一つ疑問に思つた。

「もし、仮に端末の次元移動に成功したとして、人間はどうするのよ？」

ブランは続ける。

「遺伝子をデータ数値化して、転送し…、培養液で人体を作り上げます。鍊金術で言うホムンクルスという物です」

俺らは相槌をつく。

「んじゃ、俺が使つた魔法はどうなるんだ？」

「それは、未来人が過去の魔法と呼ばれるものの全てをデータ化に成功し、マナライザーを作り出しました。ですから、貴女達の言う異星人は、全員使えます」

それを聞いて、クエスはベットに座つた。

「私たちの作ったサブマナライザーは、その補助的な装置よ。マナの容量増加つて言えば話が通りやすいかしら？」

ブランは驚く。

「成功したんですか！？」

クエスは頷く。

気づくと夕方になつていた。

「んじや、私達ファルコンの施設に戻るわ。お大事に」  
俺は会釈をし、寝ることにした。

(後書き)

なにぶん、未熟なもので、改訂版を何回も出しますが、  
これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9836j/>

世界をとるか、少女を救うか 10年2月改訂版

2010年10月8日15時33分発行